

人口減少の未来に向けて



竹村 公太郎

論説委員

(財)リバーフロント整備センター理事長

我々はどこに行くのか

21 世紀に入り 10 年が経ち、世界人口は伸び続けるなかで、日本の人口は減少傾向に転じた。

国民は将来の人口減少に不安に駆られている。たしかに人口はその国の勢いを表す重要な指標の一つである。しかし、日本の人口減少が日本社会の衰退を意味するのか？

「我々は何処から来たのか？我々は何ものか？我々は何処へ行くのか？」は画家ポール・ゴーギャンの代表作の題名である。そのゴーギャンの問いは、21 世紀の今再び甦る。

人口が膨張し続ける世界は、いったい何処へ向かうのか？人口が減少していく日本は、いったい何処に向かうのか？

世界の先頭を切って人口減少に突入していく日本は、どうやらこの問いに正面から向き合わざるを得ない。なぜなら、人口が増加から減少へ転じる日本は、文明の頂点にいとみなせるからだ。

文明の頂点にいる日本こそ、未来を見通すことができる。未来を見通せれば、我々は何処へ向くべきかを選択できる。

成り行きの文明

文明はいつも成り行きで誕生し、成り行きで発展してきた。文明が誕生し発展していく過程で、人類は未来を予知し、事前に計画し、自己を制御して文明を構築したことなどはなかった。特に、近代文明ではそれが著しい。

近代文明の幕を開いた蒸気機関の発明は偶然で、それに続いた産業革命も成り行きであった。不毛の砂漠地帯での巨大石油の発見は偶然で、それに続いた石油文明の爆発も成り行きであった。

歴史上の文明は偶然に誕生し、成り行きで発展してきた。それは当然といえば当然であった。なぜなら、人類の前に広がっていた地球は限りなく広大であり、地球上の自然資源も無尽蔵にあったからだ。

進んでいく世界が限りなく広大で、資源が無尽蔵にあるのなら、未来への懐疑など抱かない。未来への細心な計画は必要ない。膨張する欲望を制御することもない。人類は伸びやかに、楽観的に、好奇心と冒険心で、果敢に未来へ向かって進めばよかった。そして必ず、未知の世界では新しい発見があり、物質的な豊かさが待っていた。

しかし、20 世紀が終わりに近づくころから、その雲行きが怪しくなってきた。

それは、地球規模の環境悪化と資源の逼迫であった。

文明の頂点

人間活動の激しい膨張によって、大気と大地と水域は廃棄物を吸収できず、地球規模の大気汚染と土壌汚染と水質汚染が顕在化してきた。さらに、各地の湖沼や河川は干上がり、穀物大陸の地下水は非可逆的に低下し続けている。

地球には無限の包容力はなく、人間活動のエントロピー増大を受け入れるには限度があることが明らかになった。

近代文明を支えている資源が、逼迫の気配を見せ始めた。世界の諸機関による予測では、石油供給のピークは今世紀の中頃とされ、今世紀中には天然ガス、天然ウラン鉱石も底につき、今後 200 年以上持つのは石炭だけとされている。

最新の先端技術を支えるレアメタルやレアアースは逼迫し、その争奪戦は深刻を増していく。さらに、近代の人口急増を可能にした食糧増産の肥料原料のリン鉱石の供給はすでにピークを過ぎ、今世紀中には枯渇すると予測されている。地球の天然資源は無限ではない。その限界は近づいている。

このような悪い情報が次々に入ってくるのは偶然ではない。やっこの時期、我々は地球の時空間を見通せるようになったからだ。

人が遠くを見通せるのは、遮蔽物がないときである。

過去 150 年間の近代化で、日本は人口を増加させながら、経済成長の坂を一気に登ってきた。坂を登っている時には、足元を見るのが精一杯である。登っていく山頂の先にどんな光景が広がっているか見通すことはできなかった。

人口増加から減少に転ずる文明の頂点に立ったからこそ、地球の限界と資源制約を見通すことができる。

低炭素社会への展望

文明の頂点で知る未来の悪い情報に恐れることはない。どんな悪い情報でも、情報は人々を賢くする。情報さえあれば、人類の知恵はそれに対処できる。

2010 年の今、「低炭素社会」という言葉が登場した。これは温室効果ガスの二酸化炭素を排出しない社会、と理解されている。しかし、それ以上に、地球の限界と資源逼迫に対して文明のサイズを縮小させる、という意味が大きい。

かつて優れた科学者や文明評論家たちが、膨張する社会に警告を発してきた。しかし、社会全体がこのように自己を制御した未来を語ったことはなかった。

未来を見据え、計画し、膨張を抑制した低炭素社会の構築、この人類初の挑戦を文明の頂点に立った日本が先頭になって進んでいくこととなる。

この未来の低炭素社会に向けて必要な「安全」と「エネルギー」と「食糧」と「交流ネットワーク」と「生態系豊かな国土」のためのインフラ整備は目白押しである。この時期、インフラに携わる人々は英知を集めて、未来社会に備えての必要なインフラ整備のメニューとプロセスを、日本社会へ提示していかなければならない。